

第2学年*組 国語科学習指導案 平成*年*月*日(*) 第*校時 2年*組教室 指導者 岩崎 宜明			
育成する国語の能力	自らの考えをまとめ、根拠に基づいて説明する力を育てる。		
単元名	古典現代訳を鑑賞し、なぜその訳になるのかを、資料を用いて論理的に説明する。		
単元目標	<p>○古典現代訳を読み、巻末資料等から根拠を見つけようとする。(関心・意欲・態度)</p> <p>○古典現代訳が、なぜその訳になるのかの説明文を、巻末資料等を用いて作成できる。(書く能力)</p> <p>○古典文法のきまり、用法などを理解し、必要に応じて利用することができる。(知識・理解) (〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の(1)イの(イ))</p>		
単元の評価規準	関心・意欲・態度	書く能力	知識・理解
	古典現代訳を鑑賞し、巻末資料等から根拠を見つけようとしている。	古典現代訳が、なぜその訳になるのかを、巻末資料等を用いることで根拠を明確にし、論理的に説明文を作成している。	古典文法のきまり、用法などを必要に応じて適切に利用している。
取り上げる言語活動	自らの作成した現代語訳説明文を用いてグループに分かれて交流を行う。またその交流の上で教員に対し発表する。		
題材(教材)	『徒然草』奥山に猫またといふもの		
単元(教材)について	<p>(1)教材観：時代を越えて親しまれている文章であり、内容を理解しやすい。登場人物も少なく、現代語訳を比較的平易に読み取ることができると思われる。</p> <p>(2)生徒観：1年次に古典の入門を学習した生徒たちであるが、講義形式中心となり、暗記の多い科目であるとの認識を持っている生徒が多い。また、作文においては論理的に文章を作成する術が無い生徒が多く、進路選択時等において作文する際に基礎からの学習を要する。</p> <p>(3)指導観：巻末資料を用いて、助動詞の働きを理解し、それを用いて現代語訳の説明文を作成する。「過去と書いてあるからここが過去形になっている。」等巻末資料は助動詞のみにとどめておくようにする。</p>		
指導計画(学習計画)	主な学習活動		主な評価
	<p>1 『徒然草』奥山に猫またといふものの原文と現代語訳を通読し、内容の面白み等を理解する。</p> <p>2 助動詞の役割を理解し、巻末資料において、様々な種類・用法などがあることを確認し、作文に利用する準備をする。</p> <p>3 割り当てられた現代語訳一文に対して、なぜその訳になるのか説明できるようにするために、品詞分解を可能な限り行ってみる。分解したものが巻末資料のどれに当てはまるか推測し、根拠を説明する文章を作成する。</p> <p>4 作成した説明文をもとにグループで交流し、準備ができたものから教員に発表を行う。</p>	<p>・内容に関する指導者の質問に、答えようとしている。(関心・意欲・態度)</p> <p>・助動詞に様々な種類・用法があることを理解し、適切に根拠として利用しようとしている。(知識・理解)</p> <p>・品詞分解する際も、現代語訳・巻末資料を参考にしながら進めている。</p> <p>・巻末資料を根拠にした文章を作成している。(書く能力)</p> <p>・グループ交流時に自分の考えを積極的に発言できたか。(関心・意欲・態度)</p> <p>・教員発表時に適切に根拠を説明することができた。</p>	

本 時 案 (第3時)

本時の目標	○助動詞の意味を巻末資料等から見つけようとする。 (関心・意欲・態度) ○助動詞の意味を根拠に，現代語訳の説明文を書くことができる。 (書く能力) ○助動詞の意味，活用などを理解し，必要に応じて利用している。 (知識・理解) (〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の(1)イの(イ))
-------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

学習活動	指導上の配慮事項など	評価・方法など
1 前時の確認をする。	○前時の復習を発問形式で簡単に行う。	
2 本時の目標を知る	○本時の目標を板書する。	

なぜこのような現代語訳になるのか論理的に説明できるようにする

3 教科書巻末資料を用いて説明文を作成する。 (1) 割り当てられた一文の品詞分解を行う。 (2) 助動詞を見つけ意味を巻末資料より見つける。 (3) 見つけた助動詞の意味を用いて現代語の説明文を作成する。	<ul style="list-style-type: none"> ・分解ができない生徒に対して ○現代語訳から意味を予測して分解する方法も紹介する。 ・時間が来たら，品詞分解を示したプリントを掲示する。 ・助動詞活用表の見方がわからない生徒に対して ○活用によって形が変化することを口頭で復習する。 ○現代語訳に対応しているか確認する。 ○現代語訳に対応していない場合，品詞分解からの見直しまで含めて検討する。 ○まずは箇条書きで現代語訳の根拠を示す説明文を書く。 ・「○○だった」とあるのは過去の意味を表す「けり」があるから。 ○次時の生徒同士の交流を経て，教員に対する発表が行われることを理解し，できるだけ多く見つけておくようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○品詞分解を巻末資料を参考に行っている。 (関心・意欲・態度) 〈行動の観察〉 ○意味に対応した助動詞を適切に抜き出すことができる。 (知識・理解) 〈記述の分析〉 ○文末を「から・ため」等で適切に表現しているか。 〈記述の点検〉 (書く能力) ・「なぜ」という問いに対しては「○○だから」と答えることを説明する。 ・根拠を説明する文を作成していることを確認する。
4 次時の予告	○次時の交流と教員への発表の手順を説明する。	